

開城高麗宮城出土の龍頭瓦に関する検討

朴 晟 鎮

I. 序文

II. 開城高麗宮城における共同発掘調査と龍頭瓦の概要

III. 出土事例の型式分類と時期的変化

IV. 結論

要 旨 龍頭瓦は装飾瓦の一種で、文字通り「龍の頭」を形象化したものである。装飾瓦の出土事例が少なかったため正確な使用開始時期が明らかではなかったが、最近発掘調査がおこなわれた高麗正宮をはじめ、過去に発掘調査された平壤の大花宮、坡州の恵蔭院址、珍島の龍藏城から龍頭瓦が出土したことにより、その概要をうかがえるようになった。高麗時代における龍頭瓦の出現は、既存の装飾瓦である鴟尾－鬼瓦のセットから鴟吻－龍頭瓦－雜像瓦のセットへという変化を裏付けるものである。本稿では、開城の高麗宮城、平壤の大花宮、坡州の恵蔭院址から出土した龍頭瓦を対象に各属性を検討し、型式分類をおこなった。さらには、開城成均館に所在する伝高麗宮城出土の石製龍頭、伝寿昌宮出土の石製龍頭、元上都出土の石製龍頭および龍頭瓦などと比較し、時期的特徴を類推した。

キーワード 龍頭瓦 鴟尾 雜像瓦 装飾瓦 高麗宮城 大花宮 坡州恵蔭院址 珍島龍藏城

I. 序文

龍頭瓦は、建築物の屋根に丸・平瓦、軒瓦、さまざまな用途に使われた道具瓦などとともに用いられた装飾瓦の一種で、文字通り「龍の頭」を形象化したものである。龍頭瓦は、高麗時代初期までは使用されていなかったとするのが一般的な見解であるが、出土事例が少ないため、まだ正確な使用開始時期は特定できていない。これまでに判明しているのは、古代の装飾瓦が鴟尾－鬼瓦で代表される一方、中世の装飾瓦は鴟吻－龍頭瓦－雜像瓦などに多様化したことや、この変化が近世の鶯頭－龍頭瓦－雜像瓦などにつながり現在に至っていることである。このような古代から現在にいたるまでの装飾瓦の変遷については大部分の研究者も認めるところであり、一般的な傾向として認識されている。本稿ではこのような認識に基づき、高麗時代の装飾瓦の中でも龍頭瓦に着目する。これまで韓国においては、装飾瓦の研究はごくわずかであるが、断続的におこなわれてきた。しかしながら、その多くは鴟尾、雜像瓦、鬼瓦などに重点を置くものであり、龍頭瓦についてはほとんど研究されてこなかった。このように装飾瓦の研究が偏っていたのは研究者の趣向というより、研究対象としての龍頭瓦がごく稀にしか出土しなかったことに起因すると考えられる。

しかし、最近北朝鮮の黄海北道開城にある高麗時代の正宮遺跡（開城高麗宮城＝満月台）で韓国と北朝鮮による共同発掘調査がおこなわれ、平壤の大花宮、坡州の恵蔭院址、珍島の龍藏城など、以前から調査が進められてきた高麗時代王室と関連のある一連の遺跡から出土した龍頭瓦と合わせ、完全ではないものの高麗時代の龍頭瓦についての概要を把握することが可能になった。

一般的に高麗時代は、韓国文化において古代と近世をつなぐ中継の役割を果たした時期として認識されているが、高麗時代の物質文化についてはそれほど知られていない。特に装飾瓦は、出土数が非常に限られていたため研究を進めるうえで多くの困難があった。しかし古代の装飾瓦には存在しなかった鴟吻－龍頭瓦－雜像瓦などが、10～12世紀以後に中国と韓半島で共通して用いられた状況やその過程については、もう少し明確にする必要がある。というのも、現在、私たちが「伝統」として認識している装飾瓦の種類や形態の始まりは高麗時代に求められ、今日、故宮でみることのできる装飾瓦の「原型」は、高麗時代のある時期に鴟尾－鬼瓦に取って代わった鴟吻－龍頭瓦－雜像瓦にあるからである。

本稿ではこうした問題意識に基づき、今後、韓半島における装飾瓦の出現と変遷や東アジアでの装飾瓦様式の交流などを研究していくために、開城高麗宮城で出土した龍頭瓦を中心に、同時期の主要遺跡から出土した龍頭瓦について比較検討をおこなう。

Ⅱ．開城高麗宮城における共同発掘調査と龍頭瓦の概要

1．開城高麗宮城における共同発掘調査の概要

北朝鮮の国宝遺跡第122号に指定されている開城の高麗宮城（通称、満月台）は、高麗王朝の正宮として919年（太祖2）に建立されて以来、江都時期（1232年～1270年）を除く約440年の間、高麗王朝の中心であった。宮城の規模は、城壁周囲の総延長が2,170m、内部の面積が25万㎡で、各城壁の長さは、北壁220m、南壁450m、東壁755m、西壁745mになっており南が広い。東に東華門、西に西華門、南に昇平門、北に玄武門が開く。しかしながら、これまで宮城の境界が確定できる明確な考古学的知見は得られていなかった。

これまでに公表されている資料からみて、高麗宮城に対する考古学的調査は、植民地時代に始まったとみられるが、現在のような全面的な調査はおこなわれなかったようである。本格的な考古学的調査は、独立後、北朝鮮によって始まった。筆者が把握している北朝鮮による最初の発掘調査は、1954年からおこなわれた第1正殿である会慶殿の前門周辺に対するもので¹、「中心建築群」周辺の整備過程で進められたようである²。これ以後におこなわれた考古学的調査については、『朝鮮考古研究』などを通じて確認することができる。

これまでに、北朝鮮によっておこなわれた高麗宮城の発掘調査の概要は、第1表のとおりである。

1973～1974年に北朝鮮は宮城に対して大規模な発掘調査を実施し、第1正殿である会慶殿を含む「中心建築群」、「西北建築群」の配置と地形の概略を報告した。その後の韓国と北朝鮮における宮城に関する研究には、ほとんどの場合、この図面を基本にし、これに基づいて多くの発掘調査がおこなわれた。ただし、この調査成果の公開資料は「中心建築群」と「西北建築群」の一部建物に限られており、今後、より詳細な研究をおこなうためには、調査ときに収集した細部資料の公開が必要である。

その後、1985年には宮城東池と宮城東の排水路の発掘調査がおこなわれた。検出した遺構は花崗岩で作られた排水路と暗渠である。これと同じ施設が宮城西でも確認されており、青磁をはじめ軒瓦、丸・平瓦、銘文瓦などの遺物が出土した。

第1表．北朝鮮による高麗宮城調査の概要

期 間	内 容	成 果
1973～74	第1正殿である会慶殿など「中心建築群」の発掘調査 ³	高麗宮城の中心区域に対する最初の公式調査報告。高麗宮城の配置に関する基本資料を提供。
1985	宮城東池および排水路の発掘調査 ⁴	青磁、瓦当、平瓦・丸瓦・銘文瓦などが出土。
1994	中心建築群の北に位置する「元徳殿」発掘調査 ⁵	建物配置の確認。遺物が多量に出土。
1999	宮城東池の発掘調査 ⁶	池の規模、および池周囲の人工堤の土層の確認。

1994年には、会慶殿－長和殿の北に位置する元徳殿の発掘調査がおこなわれた。元徳殿は四方に回廊をめぐる独立した建築群で、本殿と後殿があり、南回廊で門の基礎が確認された。発掘調査によって元徳殿の礎石と基壇が確認され、その北方では後殿が確認された。この調査により、軒瓦、壁磚、敷磚、釘、玉類、磁器片などの遺物が出土した。

1999年には、東池の発掘調査が実施された。東池は、会慶殿東の石垣から東へ130mほど離れたところに位置し、池の規模は、南北270m、東西190mで南北に長く、周りには堤が築かれている。版築手法などが用いられた人工的に造成された堤であるとみられる。堤の土層についてかなり詳しい記述があり、堤を断ち割って土層観察をおこなったことがうかがえる。北朝鮮で刊行された資料をみる限り、東池の調査を最後に宮城に対する公式の調査はおこなわれていないようである。

その後、2007年5月15日から7月13日までの60日間、宮城中心建築群西方3万㎡を対象とした試掘調査が韓国と北朝鮮によっておこなわれ、それを皮切りに2015年度までに延べ7回に渡る共同の考古学的調査がおこなわれた（第2表、第1図）。

2007年5月15日から7月13日までおこなわれた1次調査によって、宮城の中心である会慶殿の西方3万㎡を対象に試掘調査を実施した。この1次調査では、「西部建築群」全体の遺構の有無が確認され、それまで性格が明確ではなかった宮城西側の地域に関する多くの新情報が提供された。調査の結果、「西部建築群」の建物は、場所によって主軸が異なること、調査区域の北には大型建物が位置するのに対し、南には小型建物が密集していることが確認された。このような違いは、建物、または建物群の性格と用途によって空間が分割されていたことに起因すると推定される。特に、「西部建築群」の一番西に位置する17号建物では建物内部に5つの礼壇の基礎が確認され、記録上にみえる5代王の肖像画を奉安した景靈殿と推定される。また、主建物の左右に付属建物をもち、平面形態が「亜」字形を呈する構造の建物とみられ、主建物と付属建物の柱間距離は異なり、特に主建物と付属建物の接統部分においてその差が著しい。

第2表. 高麗宮城の調査概要（2007～2014年）

次 数	期 間	目的	内 容	成 果
1 次	2007.5～7	試掘	「西部建築群」試掘調査	建物40余棟確認。 石垣および排水路など確認
2 次	2007.9～11	発掘	第1建物群発掘調査	建物5棟確認
3 次	2008.11～12	発掘	第2・3建物群発掘調査	建物10棟確認
4 次	2010.3～5	発掘	「推定乾徳殿区域」発掘調査	建物5棟確認
復旧調査	2011.11～12	復旧	「西部建築群」緊急復旧調査	—
6 次	2014.7～8	発掘	第5建物群発掘調査	大型階段および排水路確認
7 次	2015.6～11	発掘	第6・7・8建物群発掘調査	建物20余棟確認

2007年9月7日から11月16日までおこなわれた2次調査は、「西部建築群」の北東にある第1建物群を対象に実施された。第1建物群は、試掘調査により確認された建物の中で最も規模が大きい1-1号建物を中心とし、建物群全体の規模は東西47m、南北90mである。建物群は合計7棟の建物で構成され、東・西・南の三方向に回廊状の長舎を配置して1-1号建物を取り囲む。北辺は、「西北建築群」の石垣によって区画されているが、建物群の北辺と南辺には階段と門を設け、周辺の建物群への移動を可能にしていた。

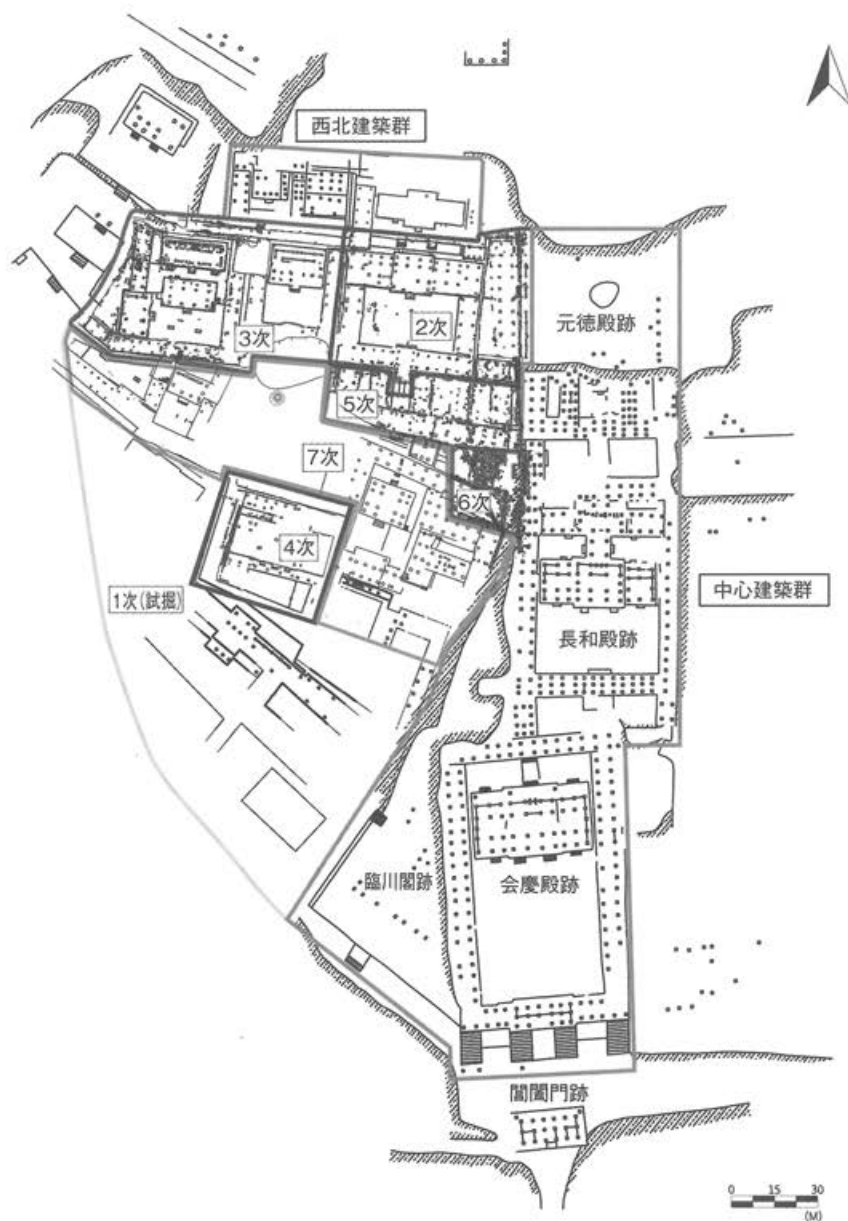
2008年11月4日から12月23日までおこなわれた3次調査は、「西部建築群」の北の中央に位置する第2・3建物群でおこなわれた。第2建物群は、2-1号建物を中心に3棟の建物が東・西・南を取り囲む一連の建物群で、全体の規模は東西32m、南北37mである。建物配置は、第1建物群と類似し、第2建物群の石垣と2-4号建物によって上・下段に区画される。建物群全体の規模は第1建物群に比べて小さい。建物群の中心に位置する2-1号建物は、桁行5間、梁行3間で、建物内部の礎石とそれにつながる引枋石や建物の裏手につながる門などがあり、内部を壁で区画した特殊な用途の建物と推定される。

2010年3月23日から5月18日までおこなわれた4次調査は、1次調査当時に調査区域の中央から確認された建物と第1・2・3建物群全体にわたって実施された。調査は「西部建築群」の中心建物の平面構造の確認と第1・2・3建物群の土層調査を中心に進められた。「西部建築群」の中心建物群は遺存状態が悪く礎石や根石は確認できなかったが、基壇の一部が確認され、中心建物周辺に回廊状の長舎がめぐっていたことが確認できた。

第1・2・3建物群の土層調査は、「西部建築群」の造成方法と現在までの変形過程を推定し復元するためのもので、個別建物群に対して東西、南北方向にトレンチを設定して旧地盤を確認し、各建物群が位置している自然丘陵の旧地形を把握した。この調査によって宮城築造以前の地形に関する情報が得られ、現在の建物群の下に埋もれた下層遺構の存在が明らかになり、宮城内部が長期にわたって継続的に使用されていたことが確認された。

2011年11月24日から12月20日までにおこなわれた安全診断と緊急復旧調査は、2011年の夏に暴雨で宮城の一部が崩壊する危険にさらされ、宮城の中心建築群と西部建築群を緊急復旧する必要性からおこなわれた。

したがって調査は、暴雨によって崩壊する危険性が高いと判断された第1建物群の南側にある石垣（石築）と建物などの遺構に対する保存措置を中心におこなわれ、石垣に崩落防止策を講じるとともに、周辺遺構の損壊の有無を確認するために緊急調査を実施した。調査の結果、石垣の一部に崩落予想区間が確認されたが、石垣の西にある第4建物群内の建物8棟には暴雨による被害はなかった。この調査では、軒瓦などの瓦類や青磁など1,500点あまりの遺物が出土した。また、緊急調査の期間中に第1～4次発掘調査区の保護盛土を追加する保存措置が執られた。



第1図 開城高麗宮城発掘調査現況図 (2007～2015年)

2014年7月22日から8月16日までおこなわれた6次調査は、高麗宮城第4建物南の中心建築群と西部建築群が連結する部分にある第5建物群でおこなわれた。調査の結果、2箇所的大型階段とそれらにつながる門が確認された。大型階段はそれぞれ幅13.4m×出10.7m、幅5.8m×出12.4mの規模で、門は桁行3間（柱間寸法は中央間で4.3m、両脇間で各3.6m）×梁行2間（柱間寸法2.5m等間）で、その下には大型階段につながる幅5.0m×出2.3m規模の架行式階段が確認された。また、大型階段の周辺から南北方向に暗渠など合計4本の

排水路が確認された。この調査を通じて高麗宮城の第1正殿である会慶殿が位置する中心建築群と第2正殿である乾徳殿が位置する西部建築群との連結部、および西部建築群内の排水体系に関する基礎資料が得られた。

2015年6月1日から11月30日までおこなわれた7次調査は、高麗宮城第2・3・4建物群の南にある5・6・7・8建物群7,000㎡の範囲でおこなわれた。この調査により、2007年の試掘調査ときに確認された碑座をはじめ景霊殿一郭へとつながる大型階段と、これにつながる回廊、2014年に調査した大型階段の西につながる歩道と門、南北方向の建物とこれを取り囲む回廊状の長舎、中心建築群である長和殿西の石垣、井戸など高麗宮城を構成するさまざまな施設が確認された。



第2図 開城高麗宮城で出土した龍頭瓦（植民地時代）

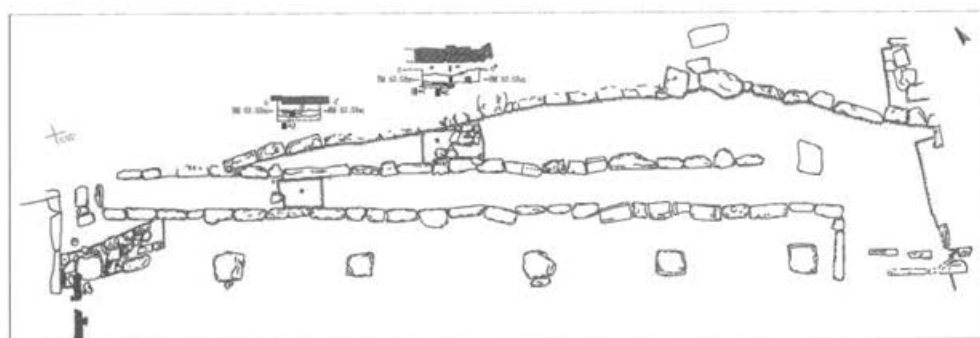
2. 開城高麗宮城で出土した龍頭瓦の概要

開城高麗宮城の龍頭瓦については、共同発掘調査がおこなわれる前までは、植民地時代に出土したという報告があるだけであった。この遺物に関しては、1枚の写真資料が伝わるのみで、龍頭表現を確認できる側面ではなく口を開けた様子を正面から撮影しているため、ほぼ完全な形にもかかわらず資料としての価値はそれほど高くない（第2図）。とはいえ、龍頭瓦の左の一部に目と耳、正面に歯と唇、舌、鼻などが認められ、今後、詳しい比較が必要である。

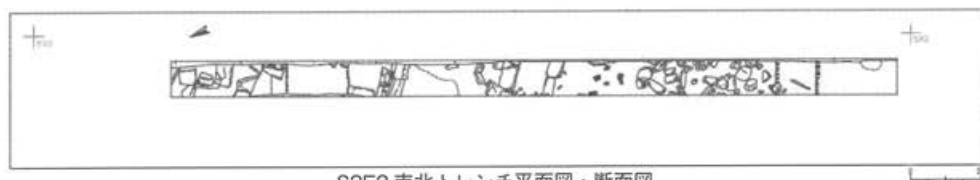
2007年から進められた共同発掘調査でも龍頭瓦片が多数出土したが、残念ながら完形品は一点もなかった。そこで、本稿ではまず、龍頭表現の特性を確認できる瓦片を紹介し、その特徴を検討したい。

2007年5月から7月までおこなわれた試掘調査中に、多数の龍頭瓦片が出土した⁷。そのうち残存状態が比較的良好で検討対象とすることが可能なものは、開城高麗宮城の「西部建築群」S2E2グリッドの試掘坑から出土した1点のみである（第3・4図）。この地域は、2015年現在、発掘調査がおこなわれていない地域で、遺構の性格については今後の調査の進展を持ちたい。本稿ではこの瓦片を便宜上「宮城-1」と称する。

宮城-1は、約1/3ほどが残存し、口を中心にあごの部分とその下の部分を欠損する。目、鼻、頬髯、眉の部分が残り、色調は灰色である。目は半球形で、正面に突出しており、その上の眉は曲線で表現されている。鼻は中心の鼻柱を基準にして小鼻が広い。上唇はめくれ上がり、奥には口蓋が表現されている。目の後に頬髯があるが、丸く表現しただけで



S2E2 東西トレンチ平面図・土層図



S2E2 南北トレンチ平面図・断面図

第3図 開城高麗宮城 S2E2 グリッドトレンチ遺構図



第4図 開城高麗宮城 S2E2 グリッドトレンチ出土龍頭瓦（宮城-1）



第5図 開城高麗宮城出土の龍頭瓦（左：参考-1、中：参考-2、右：参考-3）



第6図 遼白塔出土（中国内蒙古自治区）の龍頭瓦（左：全体、右上・下：細部）

髭の詳しい描写はない。

宮城－1以外にも2007年以後におこなわれた共同発掘調査で、いくつかの龍頭瓦が出土しているが、関連内容を収録した報告書が刊行されていないため、本稿では扱わない⁸。

また、宮城－1や完形に近い龍頭瓦以外に、龍頭瓦の各部分の破片が多数出土した。その中から発掘調査報告書で公開された資料を紹介するが、本稿では便宜上「参考」と記しておく（第5図）。

参考－1は、龍頭瓦の口の部分と推定されるが、どの部分なのかは定かではない。内面の中央と外面には多数の孔が確認され、製作上必要なものか、あるいは製作後に他の部分と連結するためのものかもしれない。これまで高麗宮城から出土した龍頭瓦にも、このような孔がほとんど確認されないことから、参考－1は大型の龍頭瓦の一部であり、内外の孔は大型の龍頭瓦を一体で作るのが困難なため、分割して製作した後、それぞれの部分を連結するために設けた可能性がある。

参考－2は角を表現したものと推定され、類例は中国遼代の龍頭瓦にみられる。中国内蒙古自治区所在の遼白塔から出土した龍頭瓦は、高麗宮城のものと細部の表現こそ異なるものの、龍頭表現の基本構成はおおよそ一致しているとみられる（第6図）。本資料は、これまでに完形の龍頭瓦が出土していない高麗宮城を含む韓国・北朝鮮の龍頭瓦の詳細な属性を理解するうえで大いに参考となる。

参考－3は、龍頭瓦の目と眉、頬髯の一部で、宮城－1より小さいものの、細部の表現

はより精密である。曲線によってごく自然に表現された眉などから、参考－3は宮城－1と類似した形態であったと推測される。

Ⅲ．出土事例の型式分類と時期的変化

1．龍頭瓦の出土事例

前節ではまだ正式な報告がなされていない2010年度と2015年度の龍頭瓦2点を除く、高麗宮城出土の龍頭瓦についてその概要を簡略に説明した。

ここからは、韓国内外で出土した同時期の龍頭瓦の資料を検討し、龍頭瓦の部分的特性を相互比較して高麗時代龍頭瓦の具体的な型式と時期的な変化の様相を確認する。また、これを通じて高麗時代の龍頭瓦の特徴を確認する。

1) 平壤大花宮

大花宮は平壤地域に所在する。ここは12世紀まで林原駅が置かれた場所で、大花宮は高麗17代仁宗（1123～1146年）が開京（開城）から西京（平壤）へ遷都を計画した際に建てられたとされ、1135年の妙清の乱の際にその建物はすべて破壊された。これまでに北朝鮮によっておこなわれた大花宮の発掘調査の詳細については、公になっていないものの、北朝鮮の定期刊行物には大花宮の発掘調査に関する論文が多数掲載されている。

大花宮で出土した龍頭瓦については、韓国の報道記事で確認することができる。北朝鮮の平壤放送を引用した連合ニュースの報道⁹によれば、金日成総合大学歴史学部によって平壤近隣にある高麗時代の宮殿である大花宮が発掘されたことが2006年12月9日付けで発表されている。連合ニュースが報じた資料¹⁰には、大花宮で出土した龍頭瓦の写真が掲載されており、その写真から断片的ではあるものの高麗時代の龍頭瓦と合わせて確認することができる。この資料は、高麗時代の王室における装飾瓦文化の一部を垣間みれる点で、非常に大きな価値を持つ。

報道写真のみでは大花宮出土の龍頭瓦を正確に説明することは難しいが、それでも次のような特徴を確認することができる。龍頭瓦の色調は灰白色で、上下の唇をつなぐ顎関節の部分で欠損し分離しているとみられる。上下の唇はそれぞれ6本と4本の突線で表現され、歯は上下を含めて10本以上が残存しているが、鋭く尖っていない。目は半球形に突出しており、右眉は欠損しているが、左面の状態は写真ではよく分からない。頬髭と耳、頭、角なども欠損しているものの、頬髭の一部や頭の痕跡は観察できる。鼻も大部分が欠損して痕跡が残るのみである。大花宮は、高麗仁宗6年（1129）に完成し、1135年の妙清の乱にともないすべてが破壊されたため、大花宮出土品は12世紀前半の標式資料としてすぐれた学術的価値を持つ。12世紀を代表する龍頭瓦の一つとみるべきであろう。



第7図 坡州惠蔭院出土の龍頭瓦（左・中：写真、右：実測図）

2) 坡州惠蔭院址

惠蔭院址は、京畿道坡州市広灘面龍尾4里134-1番地の一帯にあり、現在、史跡第446号に指定されている。『東文選』巻64記「惠蔭寺新創記」によれば、南京（ソウル）と開城を通行する官僚や百姓の安全と便宜のために高麗睿宗17年（1122）に建てられた国立宿泊施設であり、国王の行幸に備えて別院も設けられたと記録されている。

1999年に住民からの通報によりおこなわれた調査で「惠蔭院」の文字が刻まれた銘文軒平瓦が出土し、それを契機に継続的な発掘調査が実施された。その結果、東西約104m、南北約106mにわたり傾斜地を9段に造成したことが明らかとなり、27棟の建物、池、排水路などの遺構を検出し、金銅如来像、瓦類、磁器類、土器類など多数の遺物が出土した。

出土した龍頭瓦片のうち、1次調査の際にカ地区から出土した1点は、およその原形を復元することが可能である（第7図）。龍頭瓦は下部が四角形で、上部には龍頭を彫り込んで表現している。左側は大部分が残っているが、右側と上部が欠損しており正確な形状は不明である。大きく開いた口の中には8本の歯が残るが、本来は上歯13本、下歯6本程度であったと推定される。前歯と唇の間には扇形の段が5段分重なり、口の縁に沿った1条の沈線で唇を表現する。短く先端に丸みを持つ鼻には2孔が穿けられ、報告者は栗の形に似ると表現する。目は丸く、目の上には短く、尖った眉が付く。耳はラッパ形で内側には2条の沈線が刻まれている。耳下に直線を刻んで頬髯を表現し、後ろには頭が上を向いてそびえ立つ。頭の中央部はすべて欠損しており、角の有無は確認できない。龍頭瓦の後方には丸瓦を挿入するための丸い孔が穿いている。龍頭瓦の各部分を作り終えた後、表面を磨いて仕上げている。

惠蔭院址は12世紀前半に完成したとみられるが、それ以前から使われていたことが記録や遺物などを通して確認できる。龍頭瓦などについては、高麗王室の体系が完備される12世紀前半を代表する遺物と判断され、前述した大花宮と共にモンゴル侵入以前の高麗時代龍頭瓦の代表的資料として学術的に非常に重要といえよう。

前述の平壤大花宮と坡州惠蔭院址以外に、珍島龍藏城からも龍頭瓦が出土している¹¹（第8図）。しかし、一般的な龍頭瓦が丸彫り状に製作するのに対し、龍藏城から出土した龍頭瓦は、龍頭の各部位を浮彫状に表現しており鬼瓦に近い。龍藏城出土の龍頭瓦は、一般的な龍頭瓦とは明らかに異なる型式であるが、一般的な龍頭瓦で表現される多様な属性をすべて備えており、今後、開城の高麗宮城、平壤の大花宮、坡州の惠蔭院址などと比較する必要があることは確かである。ただし、龍藏城出土の龍頭は、本稿が焦点をあてている、高麗時代の韓半島内における龍頭瓦の時期的変化の



第8図 珍島龍藏城出土の龍頭瓦

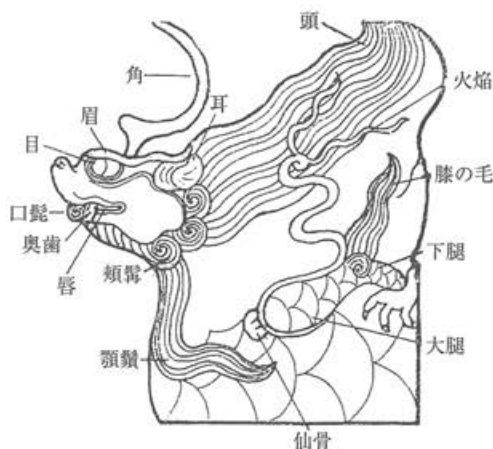
様相を把握する資料としては適していないため、ここではひとまず、検討対象から外すこととする。龍藏城出土龍頭瓦は、時期的な特性よりも地域的な特性を色濃く反映した資料と推測され、将来このような観点から本格的な比較をおこないたい。

2. 型式分類と時期的変化の検討







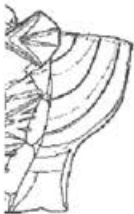

現在、韓国では高麗時代の装飾瓦に関する研究はごくわずかである。中でも龍頭瓦は本格的な研究がほとんどない。したがって、龍頭瓦を考古資料として分析することはなく、三国時代の鷗尾と朝鮮時代の鶯頭の間をつなぐ中間段階として認識される程度であった。龍頭瓦の各部分、すなわち龍頭表現の属性についての比較と検討、また、それに基づいた型式分類や各型式の前後関係など、考古資料一般に適用される研究がおこなわれることは

なかった。

ここでは、出土量は少ないものの、前述した開城高麗宮城、平壤大花宮、坡州惠蔭院址から出土した龍頭瓦を対象に、龍頭表現の属性に一貫した基準を設け、高麗時代の龍頭瓦の型式分類を試みる。出土量が非常に少ないため、現在、開城高麗博物館（開城成均館）に展示されている、石垣の「釘石」と推定される2点の石製龍頭（伝開城高麗宮城および伝寿昌宮出土）と、中国元上都遺跡（中国内モンゴル自治区正藍旗）で出土した石製龍頭



第9図 龍頭の各部名称（劉大可による）

属性		直線型	曲線型
眉			
頬髯			
耳			
頭			
出土 遺跡	韓 半島	開城高麗宮城（10～14世紀） 平壤大花宮（12世紀） 坡州惠蔭院址（12世紀）	
出土 遺跡	中国	—	
		開城高麗宮城（10～14世紀）	
		元上都（13～15世紀）	

第10図 出土龍頭の分類案1

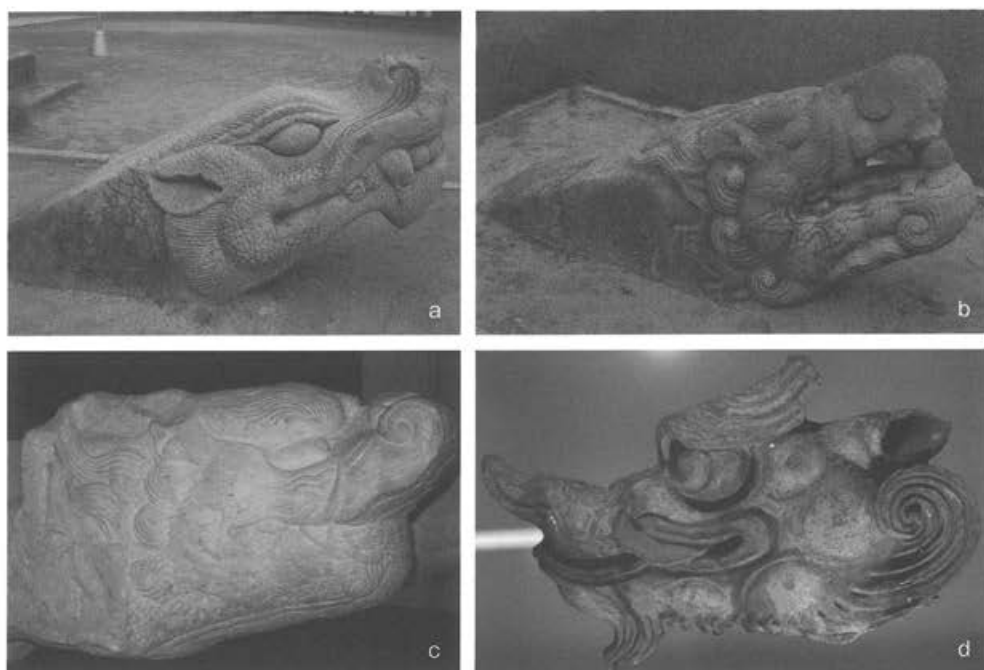
などを参考資料とし、不足を補いたい。

龍頭瓦の各部分の名称は、韓国ではまだ十分に整理されていないため、本稿では、金弘植の著書¹²⁾に引用されている劉大可¹³⁾の分類案にしたがうこととする（第9図）。劉大可による龍頭の属性分類は中国の事例に基づくものであるが、基本的に龍頭瓦は、鴟吻、雜像瓦などとともに当時の東アジアの都城文化を構成するひとつの要素として、宋、遼、金、

元など10世紀以後の中国内の漢族及び北方王朝をはじめ、高麗と日本、西夏に至るまで広く共有されたものである¹⁴。

これまで韓半島内で出土した龍頭瓦は、劉大可の分類案と比べ、省略された部分が目立つが、角、眉、目、奥歯、唇、頬髯、耳、頭などは表現されており、文字通り「龍の頭」のみを形象化したものである。一方で、劉大可の分類案のうち、高麗時代の龍頭にはみられない顎鬚、大腿、下腿、膝の毛、火焰などは、龍頭より時期の下がる鷲頭の影響を受けた要素である。

劉大可による分類基準をもとに、龍頭の特徴が明確に現われた眉、頬髯、耳、頭の4つの属性に着目し、韓半島で出土した龍頭瓦を大きく直線型と曲線型に分類する（第10図）。直線型は、開城高麗宮城、平壤大花宮、坡州惠蔭院址出土の龍頭瓦に認められる。こうした直線型龍頭瓦が出土した平壤大花宮、坡州惠蔭院址は12世紀を中心とする遺跡であるため、高麗時代前期の韓半島には直線型の龍頭瓦が存在していたことが分かる。曲線型龍頭瓦は、韓半島では開城高麗宮城でのみ確認されている。高麗宮城は江都時期を除いた高麗時代のほぼ全時期にわたって使用されたため、曲線型龍頭瓦の時期を特定するのは容易ではない。このような曲線型の属性は、開城高麗博物館（開城成均館）に展示されている伝寿昌宮出土の石製龍頭にも確認できる（第11図）。伝寿昌宮に関しても使用時期が高麗時代



第 11 図 出土龍頭の分類案 2

- a 直線型（伝開城高麗宮城出土石製龍頭）
b～d 曲線型（b: 伝寿昌宮出土石製龍頭、c: 中国元上都出土石製龍頭、d: 中国元上都出土装飾龍頭瓦）

前期と後期を含み、時期の特定は困難であるが、似た形態の石製龍頭と龍頭瓦が中国の元上都遺跡（13～15世紀）から出土しており、およそ高麗時代後期と推測することができる。

IV．結論

装飾瓦の一種である龍頭瓦が使われ始めた正確な時期についてはよく分らないが、およそ、高麗時代前期から鬼瓦に代わって建築物に使用されたと考えられている。高麗時代に龍頭瓦の出現は、既存の鴟尾－鬼瓦のセットから鴟吻－龍頭瓦－雜像瓦のセットへと装飾瓦が変化したことを裏付けるものである。このような現象は、高麗の物質文化が既存の古代の物質文化から脱したことを意味する。これまで高麗時代の装飾瓦、特に、龍頭瓦に関する研究が、その重要性にもかかわらずほとんどおこなわれなかったのは、出土量が少なかったためと判断される。ただし、最近、高麗宮城をはじめ王室と関わるいくつかの遺跡から、稀ではあるが龍頭瓦が出土し基礎的な比較検討が可能になった。

本稿では、開城の高麗宮城、平壤の大花宮、坡州の恵蔭院址から出土した龍頭瓦を対象に各属性を検討し、型式分類をおこない、伝高麗宮城出土の石製龍頭、伝寿昌宮出土の石製龍頭、元上都出土の石製龍頭および龍頭瓦などと比較して時代的特徴を類推した。

発掘調査による出土龍頭資料の確保が容易ではない状況下で、高麗時代の龍頭瓦の特徴を包括的に説明するという試みには無謀な感もある。現段階では簡略な比較に留らざるをえないが、検討が可能な部分を整理したことに意味を置きたい。

今回の検討により、開城高麗宮城から出土した龍頭瓦が直線型と曲線型に大別されること、直線型は12世紀を中心とする平壤大花宮、坡州恵蔭院址からも出土していること、曲線型は13～15世紀の間に使われた元上都の遺跡などで確認できることを明らかにした。もちろん、このような少ない資料から龍頭瓦の編年観を組み立てるのは多少の無理があるが、時代的な差により龍頭瓦の形状が変化する可能性を指摘したという点に意味を求めたい。

今後も本稿でおこなった基礎的検討をより包括的に進め、中世東アジアの装飾瓦に関わるさまざまな研究に取り組みたい。

註

- 1 「満月台の会慶殿門址から1954年に柱下部の装飾板が発掘された。この装飾板は渤海のものと似ており、4枚セットで柱下部を飾るもので、浮き彫りの華麗な蓮華文が施されている。」（科学百科事典中央出版社『朝鮮技術発展史』3 高麗編、1994年、p.89。）
- 2 1909年の純宗の南部巡幸と、1936年5月の京城女子公立普通学校生徒達の記念写真で確認される会慶殿門の南側のいわゆる「満月台階段」と呼ばれる33段の4カ所の大型階段は、高麗王朝滅亡後は管理されないまま放置されたため、階段石の相当の部分が抜け落ち、くずれた状態であった。現在の会慶殿門の階段はその後整備されたものと推定される。

- 3 朝鮮遺跡遺物図鑑編纂委員会『朝鮮遺跡遺物図鑑』10、外国文総合出版社、1991年。
- 4 開城発掘組「開城 満月台의 못과 地下下水道 施設物에 대한 調査發掘 報告」『朝鮮考古研究』第60号、1986年。
- 5 한인호「満月台 中心建築群의 元德殿터 發掘報告」『朝鮮考古研究』第92号、1994年。
- 6 리창언「満月台의 東池에 대하여」『朝鮮考古研究』第112号、1999年。
- 7 国立文化財研究所『開城高麗宮城－試掘調査報告書－』2008年。
- 8 開城高麗宮城共同發掘調査でいくつかの龍頭瓦が出土しているが、宮城－1を除き、これまで正式に報告されていない状態である。それは、2010年度の4次調査で推定乾德殿内部から出土した龍頭瓦1点と2015年度の7次調査で第5建物群内部から出土した龍頭瓦1点であり、今後刊行される發掘調査報告書において正式に報告する予定である。
- 9 「北金日成大、高麗 宮闕 大花宮 새로 發掘」聯合뉴스、2006-12-09、2006年。
- 10 「北金日成大、高麗 宮闕 大花宮 새로 發掘」聯合뉴스、2006-12-11、2006年。
- 11 木浦大学博物館『珍島龍藏城』1990年。
- 12 金弘植『朝鮮 宮闕의 막새기와 文樣과 裝飾기와』民俗院、2009年。
- 13 金弘植『朝鮮 宮闕의 막새기와 文樣과 裝飾기와』（前掲註12）
- 14 劉大可編著『中国古建築瓦石宮法』中国建築工業出版社、1993年、p.230。
- 15 ただし、日本の場合、鴟吻＝魚龍は受容するが、龍頭瓦と雜像瓦は受容しなかったとみられ、龍頭瓦を使用する部分に鬼瓦を使用している。これは韓半島の様相と異なり、今後、日韓両国の中世裝飾瓦の受容と変化－発展についての比較研究が必要である。

そのほかの参考文献

【古文献】

『高麗史』

『高麗図経』

『世宗実録』

『新增東国与地勝覽』

【単行本】

강호선 의『高麗의 皇都 開京』韓国歴史研究会、2002年。

考古美術同人『松都의 古蹟』悅話堂、1977年。

高裕燮『韓国建築美術史草稿』考古美術資料 第六輯、1964年。

金昌賢『高麗 開京의 構造와 그 理念』新書苑、2002年

리창언『高麗 遺蹟研究』社会科学出版社、2002年。

朴龍雲『高麗時代 開京의 研究』一志社、1996年。

林孝憲『松京廣攷』5、「高麗宮闕圖略」、1832年。

전통철・김진식『開城의 옛자취를 더듬어』文學藝術出版社、2002年。

황의수『朝鮮瓦』大円社、1993年。

【發掘調査報告書】

国立文化財研究所『開城 高麗宮城』2009年。

国立文化財研究所『開城 高麗宮城 南北共同發掘調査 報告書』2012年。

檀国大学校埋藏文化財研究所『坡州 惠蔭院址 發掘調査報告書』2006年。

【論文】

- 김동욱 「11,12世紀 高麗 正宮의 建物構成과 配置」 『建築歴史研究』 第13輯、1997年。
- 金昌賢 「高麗 開京의 宮闕」 『史学研究』 57、1999年。
- 박정인 「朝鮮時代 宮闕雜像의 造形的 特徵에 관한 研究」 公州大学学校教育大学院碩士論文、2006年。
- 윤나영 「高麗와 朝鮮의 마루裝飾기와 研究」 弘益大学校美術史学科碩士論文、2010年。
- 李相俊 「開城 高麗宮城（満月台）의 発掘成果와 課題」 韓国中世史学会 第74回研究発表会、2009年。
- 장상열 「満月台 長和殿建築群의 配置와 거기에 쓴 자에 대하여」 『朝鮮考古研究』 第61号、1986年。
- 장상열 「高麗王宮 - 満月台 建築에 쓴 尺度基準」 『考古民俗論文集（Ⅱ）』 考古百科社、1988年。
- 장상열 「満月台 會慶殿建築群에 쓴 자에 대하여」 『朝鮮考古研究』 第72号、1989年。
- 장영기 「朝鮮時代 宮闕 裝飾기와와 雜像의 起源과 意味」 国民大学校国史学科碩士論文、2004年。
- 전룡철 「高麗의 首都 開城城에 대한 研究（1）」 『歷史科学』 1980- 2、1980年。
- 전룡철 「高麗의 首都 開城城에 대한 研究（2）」 『歷史科学』 1980- 3、1980年。
- 鄭燦永 「満月台遺蹟에 대하여（1）」 『朝鮮考古研究』 第70号、1989年。
- 조원창 「高麗時代 雜像研究」 『地方史와 地方文化』 16卷1号、2013年。
- 홍영의 「高麗 宮闕內 景靈殿의 構造와 運用」 韓国中世史学会 第74回研究発表会、2009年。
- 前間恭作 「開京宮殿簿」 『朝鮮學報』 第26輯、朝鮮學會、1963年。

개성 고려궁성 출토龍頭瓦에 대한 검토

박 성 진

요 지 용두(龍頭)는 장식기와의 한 종류로 단어의 의미 그대로 ‘용의 머리’를 형상화한 것으로 장식기와의 출토사례가 많지 않아 아직 정확한 사용 개시 시점을 특정할 수 없었다. 그러나 최근 고려 정궁(正宮)에 대한 발굴조사를 비롯, 과거 발굴조사가 이루어졌던 평양 대화궁, 파주 혜음원지, 진도 용장성에서 용두가 출토되어 유물에 대한 대략적인 윤곽이 드러나고 있다. 고려시대 용두의 등장은 기존의 장식기와인 치미-귀면 set에서 치문-용두-잡상 set로의 변화를 의미한다. 본 논문에서는 개성 고려궁성, 평양 대화궁, 파주 혜음원지 출토 용두를 대상으로 각 부분의 속성을 검토, 큰 틀에서의 형식을 분류하고 개성 성균관 소재 傳 고려궁성 출토 석제용두, 傳 수창궁 출토 석제용두, 원상도 출토 석제, 장식기와 용두 등과의 비교를 통해 시기적 특징을 유추하였다.

주제어 : 용두, 치미, 잡상, 장식기와, 고려궁성, 대화궁, 파주 혜음원지, 진도 용장성

Consideration on *Yongdu* from the Goryeo Gungseong Palace Site in Gaeseong

Park Seong-jin

Abstract: *Yongdu* (dragon head-shaped roof tile) is a kind of decorated roof tiles. The excavated numbers of it are not many, thus it is not easy to know when it began to be produced and used. In addition to the item that was recently excavated in Jeonggung (main palace) of Goryeo, dragon head-shaped roof tile that were uncovered from Daehwagung Palace in Pyongyang, the Hyeeumwonji site in Paju and Yongjangseong Fortress in Jindo reveal the general feature of this artefact. The appearance of *yongdu* means the change of composition decoration tile from a set of ridge-end tile and monster mask-shaped tile to a set of ridge-end tile, *yongdu* and *japsang* (figurine tile). This paper firstly classify *yongdu* by analyzing typological forms and attributes of items uncovered from Goryeo Gungseong Palace in Gaeseong, Daehwagung Palace in Pyongyang and the Hyeeumwonji site in Paju, and secondly analogize the temporal characteristics by comparing stone *yongdu* in Goryeo Gungseong Palace, which is collected in Seongkyunkwan in Gaeseong, stone *yongdu* in Suchanggung Palace, and stone *yongdu* and decorated tile *yongdu* in Wonsangdo.

Key words: *yongdu* (dragon head-shaped roof tile), ridge-end tiles, *japsang* (figurine tiles), decorated tiles, Goryeo Gungseong Palace, Daehwagung Palace, Hyeeumwonji in Paju, Yongjangseong Fortress in Jinju